

右図は京都市内中心部の略図です。番号1～4で示された地域は、かつて「だいうす町」と呼ばれた、キリスト教信徒の多く住む町でした。また、1～3の地域は、かつての南蛮寺跡地ですが、今日では石碑のみが残っています。

(余談ながら、同志社大学図書館前にも南蛮寺の礎石が在りますが、跡地ではなくて、あくまで見本でした。)

1549年8月15日、フランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸しました。この時から日本におけるキリスト教の宣教の歴史が始まったわけです。

ザビエル自身はスペイン人ですが、ポルトガル国王からの依頼を受けた、イエズス会の宣教師の一人でした。

歴史には偶然性があるようですね。

ザビエルが来日するに至る経緯にも、そのようなことが重なっているように思われます。

第1点は1494年のトルデーリャス条約。当時は、ポルトガルとスペインの2国が海外に雄飛していた大航海時代です。両国は、世界を大きく東西に地域分けして布教開拓する、という条約を交わしたのです。この結果、ヨーロッパ/アフリカから東方はポルトガルの優先地域、一方、新大陸(南北アメリカ大陸)を含む西方はスペインの優先地域となりました。仮に、これが逆になっていたとすれば、ザビエルの来日は遅れたか、あるいは無かったかも知れませんね。

2点目は、日本人アンジローとマラッカで出会い、日本の存在を知ったことです。黄金の国、ジパングの噂は知っていたでしょうが、この当時、日本はまだ世界地図には登場していません。アンジローは、まさに福音を待つかのような日本を、熱心に、口説くように紹介したのです。

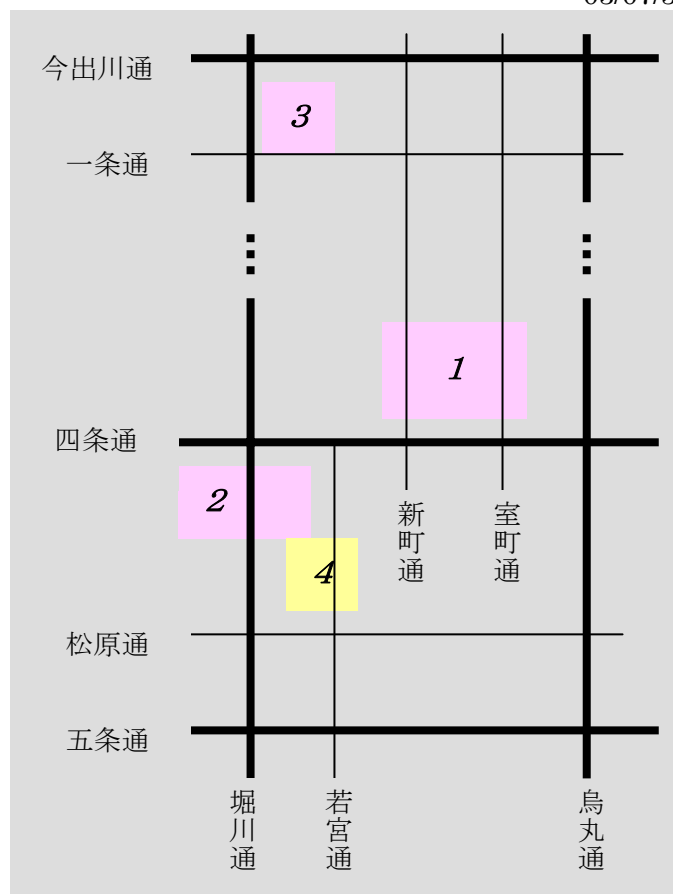
3点目は、これこそ偶然の賜物かと思いますが、実は、ザビエルは代役として派遣されてきた宣教師だったのです。本来ならイエズス会での同僚、ニコラス・ボバティリャが赴任する予定でしたが、重病を患ったため、急遽ザビエルが交代要員になったという次第です。

こうしてザビエルは、インドのゴアを東方布教の拠点とし、広大な地域の開拓に臨みました。

短かかった滞日

ザビエルの日本滞在期間は、2年3ヵ月と短いものでした。大半が九州地区(鹿児島、平戸、府内=現在の大分)および山口で、京都は滞在わずか11日間です。アンジローの話では、将軍は天皇の委託を受けて国内を統治しているとのことなので、ザビエルは後奈良天皇に布教の許可を得ようとしたのです。しかし全く無力な存在と分かったので、諦めて九州方面へ戻ったのです。

京都においては、ザビエルはまさしく、キリスト教宣教の始まりであったといえます。



私たちは「だいうそ（大嘘）」を信じています

ザビエルらは京都や九州で説法会を営みます。最も頭を痛めたのは、唯一の創造神「デウス」をいかに翻訳説明するかでした。デウスの存在を知ったなら日本の人々は驚くに違いない、きっと改宗の気持ちを抱くだろうと、宣教師らは期待していたのです。翻訳はアンジローの担当です。

さて、真言宗を多少知っていたアンジローは、大日如来になぞらえて「だいにち」と表しました。説法を始めたが、どうも人々の反応がおかしい、驚くどころか、むしろしたり顔で聞いている。人々は、（なあんだ、向こうの人も大日を拝んでいるのか、俺たちと同じだ）と思ったわけです。

これではいかん、デウスはデウス、やはりそのままいこうということになって、あらためて説法を続けます。すると今度はゲラゲラと笑いが生じてしまうのです。実は、「デウス」と言ったつもりながら、人々には、「でゆす」あるいは「だいうす」、ひどい場合には「だいうそ」と聞こえたのでした。私たちは「だいうそ（大嘘）」を信じています、これでは大笑いになりますよね。

宣教師らは大真面目だけに、相当に滑稽な場面だったことでしょう。（ぜひ聞いてみたかった）

だいうす町の始まり

ザビエルが既に離日（中国の上川島で没）した後の1593年、スペイン系のフランシスコ会も京都で活動を始めます。秀吉から布教の許可、ならびに妙満寺跡の敷地＝略図2の地域の寄進を受け、1594年に南蛮寺、即ち修道院、教会堂（聖マリア教会）と、聖アンナ病院、聖ヨゼフ病院も併設しました。（イエズス会の方は既に1576年に南蛮寺を建設済みで、四条姥柳町＝略図1の地域に、三階建教会堂〔サンタ・マリアの御上人寺〕が存在していました。）

秀吉はすぐ後に宣教師（バテレン）追放令を出しますが、一方では南蛮貿易の継承を望んでもおり、摩擦を起こすことは得策ではないと、教会の布教活動を半ば黙認していたようです。

修道士や改宗して信徒になった人々は、*聖フランチェスコの生き方を範として清貧な生活を送りつつ、社会から見捨てられたハンセン病患者や貧しい病人を病院に収容して、看護を施したのです。こうした慈善的奉仕が人々の心を捉えて、この年には約500名が受洗に至っています。修道院近くに数十軒200名以上の信徒が移住し、人々はデウスに因みこの町を「だいうす町」と呼ぶようになり、信徒は自分たちの町を「諸天使の町＝ロス・アンジェラス」と呼びました。

※聖フランチェスコ……13世紀初頭の聖人。中部イタリアの古都、アッシジ生まれ。アッシジに在る聖フランチェスコ大聖堂に対しては、本年3月1日、日本から祈りの音色として「水琴窟」が奉納されました。映画『ブラザー・サン シスター・ムーン』は、聖フランチェスコの青春時代を描いたものとして有名です。

南蛮寺前

『南蛮寺門前・和泉屋染物店 他3篇』（木下杢太郎、岩波文庫）という本に、当時の人が南蛮寺をどのように見ていたかを示す場面があります。どうやら、訪れたきり、信仰生活に入って戻って来ない人も居たようで、「天狗のような人さらい」と噂し合っています。人々にとって、不気味な得体の知れない存在に映った、というのもあったようですね。

信仰の歴史の二面性

この頃、ポルトガル系イエズス会とスペイン系フランシスコ会以外に、後者ではドミニコ会やアウグスチノ会も活動中でした。各会派の活動資金は、本来なら信徒からの喜捨で賄われるべきものですが、民衆は貧しく、改宗して支援者となる大名（※キリシタン大名）も財政は豊かではありませんでした。別途、本国の国王からも給付金が得られましたが、それらをすべて含めても、経費の1/3を充たす程度にしかならず、台所事情は苦しかったようです。

※高山右近、小西行長、大友宗麟、大村純忠、有馬晴信、細川忠興、黒田如水らが有名。

SATIS EST DNE SATIS EST

不足分を補ったのは商業活動（主に貿易）をすることでした。本国からは生糸・金・絹織物・水銀・鉛・麝香（ジャコウ）・陶器・砂糖・薬品が、また日本からは豊富な銀が輸出されたのです。戦国期には多くの大名が武器を欲しがりましたので、これも重要な収益源となったようです。

信仰の純粋性と商業活動、これは相矛盾する課題ですが、ザビエルのみならず後世の宣教師も「特別な事情によるものは商業活動でない」として認めております。それどころか、本国の国王の富を増やすことに貢献できると述べています。当然、国王サイドにも異存はありませんでした。なぜなら、この当時、布教の拡大は王権の拡大・浸透とイコールだったからです。

SATIS EST DNE SATIS EST

一方、日本の大名や時の権力者（秀吉・家康）たちも、貿易に関与することで自らの富を蓄積していたことも事実です。問題なのは、そうした利害得失のバランスが失われることでした。

秀吉や徳川幕府による禁教令発布や弾圧は、各会派の教義が問題となったのではなさそうです。布教活動の裏側にある王権の拡大により、国の転覆を招きかねないとの懸念が支配的になった時、強権が発動されたといえます。なお家康の場合は、カソリックでない、新興プロテスタント国のオランダやイギリスとの貿易が確保できる見込みが立った、ということも大きな要因でした。

権力者からの弾圧は、教会側にすれば殉教（1597年長崎26聖人の殉教、1619年元和の大殉教）となります。（ちなみに歴史上では、ローマ皇帝ネロによる大迫害（西暦64年）が最初です。）

そして一方、教会側からの迫害事件も起きています。キリシタン大名の国で例が多いのですが、旧来の仏教寺院が破却され、僧侶は処断や追放の目に会っているのです。教会史はこうした事実については概ね寡黙となりますが、信仰の持つ二面性の表れでしょうか。

ところで、日本におけるキリスト教布教は、京都と九州地区の信徒の増加がきわめて著しい。ある資料によると、1578（天正6）年頃には全国で約15万人の信徒が存在し、そのうち京都には2.5万人、九州地区には11.5万人が居たようです。また、ピーク時と思われる1600年前後だと、イエズス会でも全国で約30万人（京都は約3万人？）の信徒が存在した。当時の日本の総人口は2500万人（西日本では2000万人）と推定されており、人口比でも驚異的なレベルかと思われます。人々がこれほどまでに南蛮渡来の宗教を受け容れた理由は何だったのでしょうか。

さて、「だいうす町」や九州の信徒たちは、徳川中期以降は隠れキリシタンとして歴史の表舞台からは姿を消してしまいます。時に、1552年12月3日に上川島で亡くなったザビエルの遺体は、最終的にはゴアで埋葬され、また右腕だけは切断の上、ローマに送られました。通念からするとギョッとする話ですが、これも信仰の為せるものでしょうか。